１．実施概要

（１）日時：平成２４年１１月６日（火）　１４：００～１６：３０
（２）場所：プラザおでって　３階 おでってホール
（３）テーマ：～地域資源を活かした中心市街地活性化～
（４）進行

14:00～14:05　開会
・開会の挨拶　盛岡市長　谷藤 裕明
14:05～14:15　開催趣旨説明
・内閣府地域活性化推進室室長代理 枝広 直幹
14:15～14:40　基調講演
・岩手県立大学総合政策学部教授 倉原 宗孝
14:40～15:10　事例紹介
・盛岡市長　谷藤 裕明
・遠野市長　本田 敏秋
・田辺市長　真砂 充敏
15:10～15:20　（休憩）
15:20～16:30　パネルディスカッション
・コーディネーター：倉原 宗孝
・パネラー：盛岡市副市長 佐藤 光彦、遠野市長、田辺市長、
株式会社アスク代表取締役（不動産鑑定士）浅井 敏博、
ＮＰＯ法人いわて子育てネット副理事長兼事務局長 両川いずみ
16:30　閉会

２．開会の挨拶

- 鹿児島市を皮切りに全国２１都市で開催されると伺っており、まちづくりに関わってきた方々の声を通して各地域ひいては日本全体の活性化につながるようご期待申し上げる。
- 本市では平成２０年に認定を受け、これまで東西自由通路の整備やもりおか歴史文化館とその周辺整備などのハード事業、さらにもりおか映画祭などのソフト事業により観光客入れ込み数に一定の効果があったと認識している。現在は次期計画について検討を進めているところだ。本日は地域資源を活かした中心市街地活性化をテーマに、さらなる推進の契機にしたいと思う。

３．開催趣旨説明

- 平成１８年に改正法が施行され６年が経過しているが、１０７の市で１１８の計画が進んでいる。この時期に各地の取組みの成功例や課題を広く互いが共有しながら今後の効果ある取組みに向けてもうひと頑張りしようというのが趣旨だ。
- 遠いところからお越しいただいた遠野市の本田市長様、田辺市の真砂市長様、ぜひ皆さまの取組みが倉原先生の巧妙なコーディネートにより分かりやすく説明がなされ、また私ども内閣府への大いなるヒントとして頂戴できれば何よりと思う。これから始まる本シンポジウムでの充実したやりとりを祈念するとともに、関係者の皆さまに感謝申し上げたい。

４．基調講演

≪地域資源を活かした魅力あるまちづくりに向けて　～いくつかの事例から考える～≫

- 改めて中心って何だろう、活性化って何だろう、そのことをしっかり議論していく必要がある。単に空間的に真ん中にあるから、いろんなものが集積しているから中心なのか、中心イコール私たちにとって大切なものは何か。それは人によって、あるいは都市によってであるし、それをこの時代だからこそ考えていかねばならならい。
- 帯広市の場合、「屋台」というキーワードが出てきた。人とのふれあいが少なくなっている中で、コミュニケーションが大切ということ。そして各地に視察に出たが、そういう行動が大切ではないか。たくさんの失敗もあったがそれも宝のひとつ。寒さなどのマイナス要件が逆にプラスになった部分がある。観光客も多いが地元の方々も楽しんでいる。
- 和歌山県田辺市では、南方熊楠は大事にしたい存在で魅力があり、エコロジーという概念をはじめて出した人でもある。これからのまちづくり、あるいは活性化ということを考えるうえでも参考にしたい姿勢をもった人だ。こういう先人の考えが脈々と残っているのも大事なことだと思う。岩手県にも宮沢賢治などがいる。そのへんからヒントが出てくるのではないかと思う。

● 札幌の南にある江別市というところでもまちを明るくしたいという活性化の議論がされている。「きよしこの夜」はドイツ・オーストリアの国境の小さく暗い村から生まれた歌だが、そういう暗いところから世界に広がるようなことができないか、というのも大切だ。活性化は昼のことを考えがちだが、夜の都市計画というのもあるのではないか。健全な夜にこそ家族の絆があり、友との語らいがあり、いろんな人の温もりがあるのではないか。

５．事例紹介

（１）盛岡市

● 平成２５年までの本市の中心市街地活性化のテーマは、「商店街の賑わいや魅力を楽しむ中心市街地の形成」などの基本計画のもと、「賑わいあふれる中心市街地」と「訪れたくなる中心市街地」を実現しようとするものである。

● 盛岡市の玄関口としての機能強化を図った「盛岡駅東西自由通路整備事業」をはじめ、旧県立図書館の建物を利用した「歴史文化施設整備事業」では、昨年７月に観光資源ともなる「もりおか歴史文化館」がオープンした。ここにはこれまでに約３４万人の来入場がある。さらに前庭を整備して開放的な空間とし、ここや盛岡城跡公園内で行われるミュージックフェスティバルは、約３万４千人が訪れるイベントとなっている。また平成２１年には大通三丁目地区再開発ビル建設事業として、商業施設のクロステラス盛岡もオープンして回遊性の向上に寄与している。

● ソフト事業では、「映画の街盛岡」をキーワードに、今年で１６回目を迎える「もりおか映画祭」などを開催している。月１回無料で楽しめる「素敵なまちの映画会」や「シネマストリートギャラリー」も行っている。

● ほかに着付け教室などがある「ゆかたのまち盛岡」推進事業や駅前商店街では“開運”をキーワードにした各種イベント、大通商店街では歩行者天国を活用した賑わい創出事業などがある。地域資源としては盛岡三大麺があり、全日本わんこそば選手権などを開催。南部鉄器、古代型染め、お酒などの魅力的な資源もあり、盛岡特産品ブランドとして全国に情報発信している。また世界遺産平泉と連動した誘客の取組みや、被災地も資源のひとつとして捉え内陸部と被災地を結ぶツアーの推進も必要と考えている。

（２）遠野市

● 昭和の大合併で１町７村が合併して遠野市になり、そのあと平成に１市１村が合併して新遠野市になった。その中で「町屋のこころが息づく語らいのまち」というのが中心市街地活性化基本計画のコンセプトだ。農協も合併してＪＡ遠野がなくなり駅前本店ビルをもらったが、旧まちづくり交付金を活用して明治風の洋館としてよみがえらせた。日本通運も撤退したが同様に交付金を活用し、建物を「旅の蔵遠野」という観光拠点によみがえらせた。

● ３０数年経った市立博物館は、１００周年にあわせてリニューアルオープンさせた。また世界遺産があるなら遠野遺産があっていいんじゃないかということで、市の一等地にあった神社をよみがえらせた。これも社会資本整備総合交付金を活用したものだ。また子育てにやさしいということで、旧地域住宅交付金を活用し、子供の成長に応じて間仕切りができる市営住宅を整備した。

● このように、それぞれあるものをどう活かすか、また伝統のあるものをどうのような形でよみがえらせるか。それをコンセプトにしながらのまちづくりを行っている。「古くて古いものは滅びるが、古くて新しいものは光輝く」という言葉は遠野のまちづくりにとっては非常に大事な言葉だ。伝統がよみがえることは、そこに市民の底力が出てくるということで、そういう中心市街地活性化に取り組んでいきたいと思う。

（３）田辺市（和歌山県）

● 合併の大きな目的というのは「観光」であり、単なる観光ではなく第一次産業から三次産業まで含めたものという計画をたてている。特産品には紀州の南高梅やミカン、紀州備長炭などがあり、また９割が森林であり水資源なども含め山の恵みをまちづくりにもっと活かしていきたい。海では紀州遺産というブランドでヒロメというワカメやクエ、カツオ、マグロなど様々な魚が紀伊半島で採れる。これらの地域資源を活かした活性化を計画している。

● 田辺市には「ツーリズムビューロー」があるが、５つのまちが合併したので観光協会ではなくそういう名称にして海外にもＰＲしていこうというものだ。欧米人も増えていることから旅行業の許可をとり、自立を目指していこうとしている。

● 中心市街地には１０の商店街があるが、アクセス道路の整備や環境整備などを進めている。にぎわいの創出ということで、中心地に「ぽぽら銀座」という施設をつくり商業拠点としているほか、コミュニティＦＭもある。また図書館では大変なにぎわいがあり、文化や教育が中心市街地の活性化に結びつくひとつのヒントかと思う。文化的なことでは、街なかギャラ

リーもつくっている。８月８日と挨拶の「やあ」を掛けた「ヤーヤーまつり」は４０年ほど続いている恒例の人気イベントだ。

- 周辺過疎地の活性化も必要ということで、過疎地の産品を中心地で販売しようという取組みも行っている。これが大変なにぎわいを見せていて、これは中心市街地の高齢化した方々に好評なのと、郊外とのコミュニケーションを図れるということが重要なポイントになっていると思う。

６．パネルディスカッションの概要

≪地域資源を活かした中心市街地活性化について≫

- （浅井代表取締役）いろいろなお店を視察して出てきたキーワードが、「音・におい・光」の３要素だった。そういう視点でまちを見ていくと分かりやすいのではないだろうか。
- （両川副理事長）中心市街地活性化の社会実験に参加したが、当時は子どもたちが行く場所がなかった。やはり子どもたちの居場所づくりをしなければ。平成１８年に初めて盛岡市に親子の集いの広場「こっこ」を大通りに設置させていただいた。商店街のおじいちゃんが子どもの声に喜んだり、親子連れが増えたりした。Nanak（ななっく）に開設した「にこっこ」では森林組合の考案で市の建材を使っている。
- （コーディネーター）さきほどの３市からのお話を聞くと、盛岡市は地区それぞれの彩りを大切にしているし、遠野市さんはまちのコアの重要性を感じた。一方田辺市さんのお話からは周辺地のことも大事なことが分かった。
- （盛岡市副市長）地域資源は、市民が愛し誇れるもの。ただ、埋もれたり気づかなかったりするものもあるので、それをどうやって捉えていくかだと思う。ワークショップやフィールドワークによってその掘り起こしをやっている。外からの目というのも大事だ。
- （遠野市長）朽ち果てた社や後継者がなく絶えそうな民俗芸能が「遠野遺産」に認定されたらよみがえった。それが１２４箇所。そこに世代間の絆も生まれた。しかもそれらは市民が選ぶという仕組みをつくり、市民協働が出てきた。まちがいなく地域資源を活かしたまちづくりにつながっていると思う。
- （田辺市長）地域をＰＲするとき「物語」というのは大事だ。熊野古道をひとりで黙々と歩いてもただの山道だが、そこに語り部の説明があったら世界遺産の値うちになる。地域からはそういうものを発信するのが大事ではないか。地域が広いと資源が多くなるが、それをひとくくりにする言葉が課題で、「杜の都仙台」のような言い方を考えているところだ。
- （浅井代表取締役）大事なものはどこなんだろうかといった時に、ひとつのランドマークは盛岡城だが、東京駅と同じ建築家がつくった赤レンガもすごく大事だ。また橋がたくさんあるが、この橋のたもとがすごい

大事なんではないかという考え方があった。この橋のたもとがどうもさびれている、この橋のたもとを元気づけないとだめじゃないかということから始まった。赤レンガのランドマークがある中津川・中ノ橋は、鮭があがってきて、子供たちが水なかで遊んだり写生しているなど心象風景があって、そして岩手山が見える、こういういちばん大事なポイントを残そうじゃないかということで、前の市長の桑島さんが助役かの頃だったと思うが、一緒に共同開発しないかという話になった。景観的理由から、ここに絶対建物を建てないという地域も市につくってもらった。そういう思いがなければまちづくりはできないんじゃないか。

- （盛岡市副市長）個々の能力はあっても、どういうネットワークを持ってるかという部分も大事。人材育成の面でもそういうことを重視していきたい。
- （遠野市長）地域資源を活かす様々な制度が各省庁にあるが、その枠をなくした新しい制度があればもっといいのでは。また人口減少が大きな問題だが、これに立ち向かうにはかなり思い切った発想、仕組みがないとなかなか難しいのではないか。
- （田辺市長）街なかに居住をどうさせるか。若い人がなかなか街なかに住まない。そこには子育ての問題もあるし、中心市街地活性化の原点でもある。またまちづくり会社が自立して運営できる状況をどうつくるかも課題だ。補助金に頼るのも限界がある。
- （浅井代表取締役）空き店舗もそうだが、空き家も大きな問題になっている。所有者が分からないのもある。何らかの形で有効活用する場合は、補助を出すとか。リノベーションで若い方が住めるようにつくりかえるとか。そういう政策がとれることが大事。
- （両川副理事長）八王子市はこの前、駅前に産学官連携で子育て支援の施設をつくったが、行政、民間がそれぞれ役割を分担してやった。いろいろ巻き込んで、新しい公共の考え方を入れてみんなで補完しあうことが大切では。波及効果も出てくる。
- （コーディネーター）人を育て磨くというのが大切で、そのこと自体が活性化の豊かな財源だと思う。その中でネットワークも大事だという指摘があった。また子どもと、それをとりまく中でいろんな分野の広がりも出てくるというお話もあった。世代間の関係も大事だと思った。歴史や伝統といった“大きな物語”と身近にある“小さな物語”があり、それが支えあいながら多重に魅力が広がっていくのではないか。

７．閉会